

大きくなったら社長になりたい、という子供が最近さっぱりいなくなった。でも、昔は結構いたし、海外にはたくさんいる。たぶん、今の日本では、身近にいる社長が格好良くないからですよ。

先日、こんな嘆息交じりの分析を、東京・板橋区の会社応接室でうかがった。嘆きの主は、光学部品・装置メーカー「ルケオ」会長の吉村健正さん(62)。同社は従業員38人の小所帯だが、ガラス製品のひずみ検査器では国内トップシェア(占有率)を誇る。

### 「すきま」生き抜く格好良さ

戦前から工業が盛んな板橋区では1990年代以降、大手工場の海外移転などで町工場の廃業が相次いだ。参院選を前に、中小企業主の声を拾った先月7日の都民版記事で、「大企業は食べ物を求めて海外にも行ける『動物』」。

中小企業は『植物』として板橋に根をはって生き抜くしかない」と語っていたのが吉村さんだ。

企業社会を弱肉強食の自然

界になぞらえ、植物として生きる覚悟とは。取材を申し込むと、子供が社長を夢見ない話に続き、「税制、融資、教育。日本には、もの作りを支える体制がない」とぼつさり。そんな国で吉村さんが取った戦略が「ニッチ」だった。

ニッチとは、「すきま」の意。大企業が相手にしない市場の小さな分野を技術で制し、トップを狙う。吉村さ

社会部次長 井深 太路



んの会社は業界で「典型的なニッチトップ」と言われる。原点は高3の頃の出来事だ。今は亡き父親の工場が大

手に仕事を切られて解散した。父と再起を図ったのが現在の会社だ。だから最大の目標は会社の継続。会社を大きくする気はなく、一人ひとりの技量を上げ、世に役立つものを永く提供したい、という。

大樹の陰に身を寄せても安心と言えないなら、すきまに活路を求める。逆境を

したたかに生き抜く姿は十分、格好良いと思う。いつの世も、子供のあこがれはヒーローだ。すきまでも何でも、職人を守り抜く社長なら子供があこがれないとは限らない。だが現実には、守りたくても守れずに倒れる町工場が多いのだ。これでは子供たちも就職する頃にはすっかり安定志向になってしまふ。「もの作りは失敗から学ぶが、経営を一度失敗すると、もの作りが終わってしまう」と吉村さん。町工場の社長さんが輝いて見える日を取り戻したい。